

---

## 学会参加報告 (Conference Report)

---

# 第 35 回日本スポーツ運動学会大会参加報告

川口 鉄二

仙台大学体育学部

Tetsuji Kawaguchi: 35th Conference Report of Japan Society of Sport Movement and Behavior. Bulletin of Sendai University, 54(2): 73-77, 2023.

Faculty of Sports Science, Sendai University

---

**KEYWORDS** movement theory of sports, diversity, morphology

**キーワード** スポーツ運動学, 多様性, モルフォロジー

## I 日本スポーツ運動学会について

---

第35回日本スポーツ運動学会 (Japan Society of Sport Movement and Behaviour) 大会が2022年3月13日に筑波大学を大会事務局としてリアルタイムのオンライン形式で実施された(図1)。この学会は1987年に当時の日本体育学会の体育方法専門分科会会員の有志らが中心となり、実践と直結した研究領域の構築を目指す研究会として筑波大学を中心に発足し、1993年に現行名称で日本学術会議の登録団体として認められ、以来、厳密な学問をベースとして独自性を維持しつつ発展を遂げてきた。

学会の理論的基礎となったのは1960年に上梓された当時のライプツィヒ体育大学K.Meinel教授のスポーツ運動学 (Bewegungslehre, 1981年邦訳) であり、それまでの客観的スポーツ諸科学の研究とは本質的に異なる「先科学」という強い実践性が、実践現場にかかわる指導者及び研究者を中心に歓迎された。周知のようにドイツではその後、サイバネティクス的な運動学へと変容してしまうのだが、1994年にK.Meinelの遺稿がドイツではなく日本に手渡されたこと

で、生前のK.Meinelが意図していた新たな理論は日本で開花することになる。本学会はこのモルフォロジーロギー的感性学 Ästhetik, そして人間学・現象学の基礎付けにもとづいて、着実に理論的な進化をみせている。

既にK.Meinelが提言していたように、スポーツ運動学はコーチング学の基礎と位置づけられることもあって、スポーツ運動学会設立の直後には、日本体育学会体育方法専門分科会も「日本スポーツ方法学会 (後に日本コーチング学会)」として独立したように [朝岡正雄, 2014], 既存スポーツ諸科学の「寄せ集め」状態からの脱却を意図した動きは、近接する学会同士の協力関係の有無を巡っても注目されるところである。

## II オンライン大会

---

日本スポーツ運動学会大会は隔年ペースで地方拠点でも開催され、これまでに仙台でも2回 (秋保1996, 2005) 開催されている。今年度は3回目の大会開催地候補にも上がったが、コロナの影響によって昨年度に引き続きオンライン大

会となり、仙台からのリモートで大会の企画・運営に協力することになった。大会全体の企画は新たな試みとして、全国各地で時代を敏感に読み取って奮闘し、成長著しい若手の運動学研究者達に委ねたところ、コロナ禍による生活形態の変容や多様性の時代的流れを考慮し、「運動学の未来へつなぐ」というテーマが提案され、講演、シンポジウム、一般発表という構成で実施されることとなった。

本部側では事前に各パネリストの発表趣旨や用いられる予定の事例を確認した上で内容の偏りを確認する予定であったが、既にシンポジスト側での複数回にわたる打ち合わせにそのことも織り込み済みであったため、安心して任せることができた。

### Ⅲ 開会

全体の進行役である佐藤 晋也氏（東京女子体育大学）の緊張感の漂う開会宣言に続き、理事長からの挨拶では学会研究誌の編集方針についてのエピソードが紹介された。この学会はもともと査読がシビアで「敷居の高い学会」というイメージがあるようだが、編集委員会や査読者の教育的で手厚い対応の編集実態に驚かされたという。実践への寄与を重視した研究内容が前提とはいえ、発生論を中心に据えた学会として誤解が無いよう、学術論文受理のための適切なアドバイスや提案を惜しまないのである。もちろんその分、査読者側の負担はかなり重くなってしまうのだが、スポーツ運動学を正しく理解し、実践成果を研究論文としてまとめて欲しいという熱意がこの研究誌及び学会の質を維持していると言う。

### Ⅳ 基調講演

大会は通常の2日間を1日に集約して企画され、最初に筑波大学で長年にわたり運動学研究を牽引してきた佐野淳教授が「スポーツ運動学と運動形態学」というテーマのもとで基調講演を行った。今日ではすっかり聞かなくなった「運動形態学」という言葉を敢えてテーマに取り上

げた際には、佐野教授自らが、退官と言う区切りの年に若手研究者に伝えるべき思いが込められていたように思われる。そしてそれは学会発足当初に強調されていたゲーテのモルフォロジーという原点の再認識を促す内容であった。

昨今の現象学的な基礎付けを持つ運動学の理解を進めるために、歴史を辿ってK.Meinelの運動形態学的（モルフォロジー）立場を再考、検証していくと、そこには既に現象学的立場が含意されているという。当時、世界の体操界を率いていた金子明友氏のK.Meinel運動学との出会いとその状況が意味することにかかわる考察は、まさに今後始まるであろう金子理論研究の序章のようにも感じられた。そして、日本の運動学研究の発展を辿りオランダのポイテンディクによる機能運動学を再検討してみると、その前提にはフッサー現象学が堅固な方法論として基礎づけることができる。それはK.Meinelの時代からすれば、難解な科学用語から馴染みのない哲学用語への変更となって戸惑う声も決して少なくはないのだが、新たな聞き慣れない用語と向き合うことに躊躇する会員に向けては、実はその対象は、当初から目指されていたK.Meinelの運動形態学的研究法の中に既に存在していたと指摘するのだ。

実は学会発足当時以前には全盛期であった運動形態学的研究法（モルフォロジー）は、今日の現象学的な研究視点から振り返ると、極端に言ってしまうえばそれはバイオメカニクスの研究と混同される恐れがあり、佐野教授自らの過去の研究を振り返ってみてもそのような誤解を払拭することを示す必要があったのかもしれない。当時の研究手法の一部は、旧ソビエトで主流であった分析方法であるDHfK方式（東ドイツ体育大学）という実験法が利用されていたので、自然科学的な研究との混同は避けられないという。しかし、そこには常に発生論的な分析目的が意図されていたことは容易に確認できるし、それによって実際の競技世界の研究手法として日本の体操が世界一の座を守り続けることもできたともいう。現象学的な基礎付けがまだ不十分であった当時は、科学的研究として了承されるために必要な戦術として、キネグラムを用い

た数量化データが利用されたに過ぎないのだ。従って、モルフォロギー的立場は今日においてもその重要性には全く変わり無く、運動のかたちを分析することがスポーツ運動学の中心的な課題であるという主張には納得させられ、極めて貴重な講演内容であった。

#### IV パネルディスカッション（テーマ： 「多様性時代に運動学が活かされる」）

パネルディスカッションではコーディネーター（仲宗根森敦氏：東京学芸大学）より、今日の指導実践現場において急速に普及するICT機器の利用に対して、それらの安易な利用に潜む問題点を確認する必要性が提示された後に、3名のパネリストのそれぞれのテーマをもとに活発な議論が行われた。

最初に「ビデオコーチと素材分析・映像との付き合い方」（村山 大輔氏：至学館大学）として、小学校体育でのタブレット端末の導入例が取り上げられ、子供たちが運動の結果だけに目を向けてしまい、動きの内容に関わろうとしなくなる傾向が指摘された。また、「YouTube先生」を利用する際にも情報の過多と言う問題を示し、学習者だけでなく指導者自身の運動観察能力の低下という傾向に対しての危惧が指摘された。

このような映像機器の問題は携帯型ビデオカメラの普及時にも同様に話題になったこともあったが、今日の映像情報はそれとは比較にならないほど膨大かつ身近なことから、具体的な問題点の指摘には重みがあり、教える側が何を伝えたいのかという原点を問いかけるものでもあった。

「多様な価値観を持つ学習者に指導者がどう向き合うか」（松山 尚道氏：天理大学）というテーマでは、スキー指導で足の痛みを訴える初心者の例をもとに、「やればわかる」という指導が今日では通用しない時代になっていることの指摘とともに、様々な状況下でパトスに置かれた学習者に対していかに「なじみ」を感じさせ、能動発生に向けた指導に導いていくことの重要性が強調された。様々な「やりたくない」事情を背景に持つ学習者に対して、

カーのペンタグラムを引き合いに、「必然」と「規範」の時代的変容に対応すべきと言う提言が例証とともに示されたことは画期的であった。

「これからの時代における動感分析の意義」（佐藤 晋也氏：東京女子体育大学）では、ここでも昨今のICT機器の普及姿勢や日本スポーツ協会によるコーチングの基本姿勢についての提言に対して、形式的な立場の理解はできるとしながら、そこでは最終的に不可欠となる動感分析が欠けてしまっていることを鋭く指摘していた。

自らの指導事例から、なじみの段階で躓いていた学習者が最終的に課題を達成できたのは、決して単位取得と言う切迫性からではなく、「動きを覚える」という動感の充実に突き動かされていたという報告内容に共感した会員は少なくないであろう。

まとめとして、多様性の時代こそ映像を利用してできなかつたり、様々ななじみへの課題を持つ学習者に対しては、パトスにかかわる理論を持っているスポーツ運動学こそ、これからの時代に必要とされる理論であり、今後更に研究を深めていくべきことが確認された。

#### V 一般発表他

午後からは計5件の一般発表が行われた（別掲プログラム参照）。内容は技術発達史、技術分析、幼児の発生分析、実技授業のオンデマンドの課題そして運動の抑止現象に関する研究と多岐に渡っていることも今回の大会テーマを反映して貴重なものであった。

因みに、この学会の特徴でもあるのだが、一般発表の持ち時間は20分と長く、また、事前提出の抄録集もA4で8頁を基準としているため、各発表テーマに関しての十分な内容の把握と議論を可能としている。一方で、業績数獲得を意図した一般発表としては荷が重すぎることになるのだが、これも、この学会発足当初からの基本方針であり、純粋性かつ独自性を持つ学会組織として真摯にその学術姿勢を継続してきたことが今日の発展につながっているものと思われる。

## VI 新会長による閉会挨拶

---

日本スポーツ運動学会が客観化・自然科学化への誘惑に負けず、動く主体を見失わずに独自に発展してきたことは国際的にも特筆されてよからう。今後は同様に純粋な理論研究を押し進め、かつ掘り下げていく運動伝承研究会や、現場の指導者の受け皿となるコーチングやスポーツ教育系領域の学会組織との協力体制も視野に、わが国のユニークなスポーツ運動学の更なる発展を期待したいものである。

学会大会の閉会に際しては、前年度の学会大会前に急逝された元信州大学の渡辺伸会長に代わって選出された筑波大学の佐野 淳新会長が閉会挨拶を行い、講演内容に加え、今後もスポーツ運動学の発展・普及に向けて尽力すると

いう力強い決意をもって、無事大会は終了した。次回大会は白鷗大学での久々の対面開催を予定している。

## 文献

---

- 金子明友 (1981) マイネルスポーツ運動学. 大修館.  
金子明友 (1998) マイネル遺稿『動きの感性学』. 大修館書店.  
金子明友 (2012) コツとカンの動感深層. スポーツ運動学研究 25: 1-15.  
朝岡正雄 (2014) 体育方法専門領域. 日本体育学会.

( 2022年12月6日受付 )  
( 2023年1月17日受理 )

## 第35回 日本スポーツ運動学会大会プログラム

大会テーマ:「運動学を未来へつなぐ」

プログラムすべて zoom でのリアルタイムオンライン  
事務局: 筑波大学  
日本スポーツ運動学会ホームページ: <https://www.bewegung.jp>

令和4年3月13日・日曜日

○9:00	開会 開会の挨拶: 川口鉄二 (理事長/仙台大学) 学会賞 表彰式	
○9:15~10:40	基調講演 「スポーツ運動学と運動形態学」 司会: 川口鉄二 (理事長/仙台大学) [講師] 佐野 淳 (筑波大学)	
	(休憩 10:40~10:50)	
○10:50~12:20	パネルディスカッション 「多様性時代に運動学が活かされる」 コーディネーター: 仲宗根 森敦 (東京学芸大学) パネリスト: 村山 大輔 (至学館大学) 「ビデオコーチと素材分析・映像との付き合い方」 松山 尚道 (天理大学) 「多様な価値観を持つ学習者に指導者がどう向き合うか」 佐藤 晋也 (東京女子体育大学) 「これからの時代における動感分析の意義」	
	(昼休み: 12:20-13:15)	
○13:15~15:05	【一般発表】 ※1件割当20分(発表15分、質疑応答5分)	
	☆口頭発表(1) 13:15-14:15・・・座長: 丸井一誠 (金沢星稜大学)	
	1. 平行棒における支持系の技術発達史研究	○小島 廉生
	2. 野球の投手における「コントロール」の技術分析	○鈴木 直樹
	3. 幼児期における動感形態の発生様態について	○濱崎 裕介
	(昼休み: 14:15-14:25)	
	☆口頭発表(2) 14:25-15:05・・・座長: 金谷麻理子 (筑波大学)	
	4. 器械運動のオンデマンド型オンライン授業の課題 ー技の運動観察指導の事例分析ー	○上原三十三
	5. 遂行抑止現象の解消に向けた動感修正指導に関する一考察 ー平均台の<ロンダート下り>を例証としてー	○新竹 優子
○15:05~	閉会の挨拶 佐野 淳 (日本スポーツ運動学会会長代行/筑波大学)	

図1 大会プログラム

